

エゾシカセームにこめられたメッセージ

東京農大 エゾシカ学 学術研究員 北原 理作

NPO 法人北海道自然資源活用機構は、エゾシカセームを商品開発しました。

報道する際、販売購入する際、誤解ないように、この商品にこめられた想いを少々述べさせていただきます。商品同封の辻本理事長のメッセージもほぼ同じ内容ですが、エゾシカの被害の現状などを調査研究してきた立場で述べます。

まず、エゾシカに対して、様々な感情があるはずで、「かわいい」「かっこいい」「憎たらしい」「かわいそう」「美しい」など・・・。

「憎たらしい」というのは、被害者の害獣感情です。典型的なものが被害額として表わされます。

「かわいい」というのは、被害者以外の方が抱く、人間として当然の感情で、確かに子鹿や顔の表情にはかわいさを感じます。特に、ペットに抱く感情に近いでしょう。

「かっこいい」「美しい」というのは、オスジカや野性的なたくましさを野生の鹿に感じる時でしょう。特に角は鹿の象徴で立派です。また、神秘的と思える出会いの瞬間もあります。神鹿という位置づけもありますし、鹿は、奈良の鹿のように、古来から歴史・文化とも強く結びついております。

「かわいそう」というのは、「ハンターに撃たれた鹿を見て」「交通事故死した鹿を見て」「食卓に出た肉を見て」「狭い場所で飼育されている鹿を見て」「餓死しそうな、もしくは餓死した鹿を見て」など・・・でしょうか？

交通事故は、減らす努力をしなければなりませんし、人間誰もが望むことだと思います。

エゾシカは、ニュージーランドやオーストラリアの鹿とは違い、外来種ではなく在来種であり、ペットでもありません。野生動物です。一部野生の鹿を捕獲したり、その子孫が動物園や牧場飼育（家畜）されていますが、野生動物として、全道的に分布しております。

明治時代には、乱獲と大雪により絶滅しかけた動物であり、自然淘汰が成獣にまで及ぶと減少してしまいますし、子鹿の生存率が暖冬などにより高い場合、増加に転じます。

過去オオカミという捕食者もおりましたが、現在は、狩猟、交通事故死、自然淘汰に、ヒグマやキツネおよび猛禽類による捕食圧がわずかにあるのみです。栄養状態は、農耕地の拡大に伴い、一部過密による自然植生が衰退した場所を除き、高い状態で安定しております。

自然淘汰は積雪条件に左右され、交通事故（車やJRとの衝突）は、年々増加傾向にあります。一方狩猟圧は、許可条件や規制条件にも左右されますが、少なくとも現在のハンターの年齢構成を考えると、高齢化と後継者不足により、この先弱くなることでしょう。さ

らに日本は、家畜依存社会であり、フレンチなどでは「ジビエ」として重宝されますが、全国的な鹿増加とも重なり、食糧としての需要は低いという状態が、狩猟圧の低下を顕著にしています。

「かわいい」という感情を野生動物に抱きすぎると、人と野生動物との距離が接近しすぎて、事故や餌付けなどによる新たな問題を招き、結局駆除せざるを得ない状況に陥ることがあります。ペットは伴侶ですので、それらと混同してはいけません。家畜も、人間が改良したり繁殖させたり給餌したり、人の存在無しには存在しないもしくは存在出来ない動物ですから、野生動物とは、おかれていた環境が全く違います。野生動物は、自然界の生態系、食物連鎖の構成種、それぞれの個体群、個体として、厳しい環境を生き抜いています。

しかし、唯一共通している点は、尊い命であるということです。ですから、ペットを捨てたり、家畜を劣悪な環境で飼育することは愛護の観点から問題ありますし、死んだり、と畜する状況に直面するのは辛いことです。自然淘汰の場合は、確かにかわいそうですが、自然現象ですから、止むを得ないもので、それを助けてしまっただけでは、バランスも崩れますし、数だけ多くても質が悪い個体群が出来てしまいます。しかし、それらの死も、食物連鎖の中で、別の命を生かす糧となり無駄死ではありません。

唯一野生動物に介入するとしたら、絶滅危惧種の増殖、救護、野生復帰のためのリハビリなどで、絶滅危惧に至った大きな原因として、生息地の開発や密猟など人間の社会経済活動の影響が強い場合でしょう。

大部分の消費者は、家畜が最後死ぬ瞬間に立ち会うことはありません。でも、誰かが代わりに立ち会っています。植物の収穫でも同じことです。普段利用している例えば牛革製品も、その副産物です。革製品には、それ以外、野生獣を原料にしたもの、皮をとるために家畜化された家畜原料のものが存在します。

人間は、他の生物の犠牲があつて、はじめて存在出来ます。人それぞれ意識の強弱はあつても、それは事実です。重要なことは、生かされているという意識、言い換えると感謝の気持ちでしょう。

例えば、「撃たない殺さない」「殺すけど食べない」「殺して食べる」「目的無しに殺す」を挙げると、まず殺すのか殺さないのかという選択、それから目的、そして食べるか食べないかという選択があります。

現在、温暖化対策が急務で、石油資源依存から、バイオマス、自然エネルギーへの転換が図られておりますが、温暖化で暖冬になって、鹿が増えているのであれば、我々の責任ですし、植物系バイオマスでも、動物系バイオマスでも命の犠牲であることにはちがいません。共生するとは、瞬間的なものでなく、持続的なものでなければなりません。

ですから、殺さず全とうまくいくのであれば、無理に目的無しに殺す必要はありません。手負いを生み出すストレス解消のような狩猟は批判されても仕方ありません。被害対策は、

殺さない手法もありますが、それでも限界はあり、ある種が増えすぎてバランスが崩れたり、樹皮食いなどの自然植生の衰退が激しい場合は、乱獲しない程度のある程度の間引きは必要です。駆除や狩猟により個体数コントロールを図る都道府県策定の管理方針（保護管理計画の施行）が一般的です。

あとは、その捕獲した個体を、「もったいない」「申し訳ない」と感じ食べるか、もしくは食べないかですが、「かわいそう」なのは、殺したこと以上に、その死が報われないことだと思います。現在は、基本的に山野における残滓放置は禁止ですので、食べないのであれば、廃棄処分としてゴミ扱いです。それはかなり無責任でただの無駄死です。

食べるというのも、ハンターの自家消費から、商品としての流通まで様々ですが、いずれにせよ、利用するべきです。やるべきでないことは、商業主義の持続性を損なう乱獲ですので、常に歯止めをかけるシステムの構築と監視が必要です。

エゾシカの皮は、さらに価値がないと、ゴミ同然の扱いをされ捨てられ続けてきました。それを解決する1つの方法として、エゾシカセームが誕生しました。エゾシカセームを利用いただくことにより、無駄死を減らすと同時に、鹿の価値を見直していただければ幸いです。

需要が高まり過ぎて、乱獲してまで、販売することはありません。先のことの心配よりも、毎日捨てられている現状を憂うべきです。

もう1点は、販売による売り上げを、さらなる回収率向上や、自然環境の保全活動への還元に充てる、循環社会の構築が必要と考えています。

イメージや建て前だけの販売消費活動からの脱却を喚起する商品がエゾシカセームです。

値段や品質などを含めて人工物と比較することは結構ですが、人工クロスは命を犠牲にしていないから良く（人工物の多くも、その製造過程では多くの環境破壊を引き起こしている例は多々あります）、エゾシカセームは命を犠牲にしているから駄目という単純なものではないはずで、使わないことこそ命の犠牲であること、使わなければ、もしくは食べなければ「ありがとう」の気持ちは生まれなことを理解いただければ幸いです。